

箱根庭園

サラトガの日本庭園支援報告書

サラトガ市（アメリカ・カリフォルニア州）

2009.04.

小形会

The inaugural garden friendship

Our purpose here Hakone Garden is to demonstrate what an authentic Japanese Garden is not a replica of another (historical) Japanese Garden in Japan.

We believe deeply in our heart that the expectation and vision of the committee is on the right course.

Like it or not, Americans must take care of Japanese Gardens here in America. Please understand what we as a Japanese can only provide you Japanese spirit, idea and method of polishing this wondrous Hakone Garden and the rest is in your hands.



はじめに

昨年秋に、箱根財団に庭園の管理運営について専門的に議論する組織、「庭園委員会 (Garden Advisory Committee)」が設立されました。このことを受けて、箱根財団では以前からマスタープラン (庭園管理運営基本計画) により提案されていた庭園技術の国際交流事業の第一回目として、小形会との間でこのたび庭園技術支援及び技術者交流が行われました。

そもそも箱根庭園は、1915年、サンフランシスコで開かれたパナマ太平洋万国博覧会で日本文化に大変興味を持った創始者の富豪オリバー、イザベル・スタイン夫妻がその翌年、日本を訪れ、日本の箱根の風景、とりわけ富士屋ホテルの歴史を感じさせる重厚かつ荘厳なたたずまいと手入れの行き届いた美しい日本庭園に魅せられたところから始まります。

帰国後、夫妻は日本から宮大工、庭師を雇い入れ、庭園築造を開始。「箱根庭園 Hakone Garden」と名付けました。1917年に建設された書院風別荘 (月見台) は、書院造りと数奇屋造りを融合させた日本式家屋で、書院には床の間や引き戸、違い棚を設え、数奇屋には加工ものを避け自然素材を使用するなど、最小の装飾で造られており、軽やかさが強調されています。

庭園は池泉廻遊式で、主景は中央の池と南側斜面の山筋から水を落とした滝流れで、築山の形状や滝石組み、景石の配置、飛石の打ち方などに伝統庭園の手法がみられます。

箱根庭園は、現在、箱根財団によって管理運営されていて、文化活動では、シリコンバレー在住の日系人や企業を中心に結成された「箱根庭園支援の会」の協力で、毎年5月に箱根祭りが開催されています。生け花展示や茶会、少林寺拳法の実演のほか、在米日系企業によるパソコン、日本往復航空券、デジタルカメラなど豪華賞品が揃うオークションなども行われ、その収益金は全て箱根ファンデーションに寄付されるなど、庭園を地域で支える体制が確立しています。

2003年にはアメリカ合衆国の重要文化財に登録され、益々、歴史的価値を上げています。また、2005年、スティーブ・スピルバーグ監督のハリウッド映画「SAYURI」の舞台にもなり、多くの人に注目されることになりました。

このように90年以上の長い歴史を持つ日本庭園は多くの市民に愛され、日本文化の発信基地としてさまざまな日本文化関連の催しの会場として現在利用されています。

さて、今回の支援では、星野氏を団長に総勢12名。実にテキパキとした動きの中に繊細な手技の世界を披露し、多くの市民、庭園関係者から注目を受けました。

正味4日間という短い期間の作業ではありましたが、石の扱いとその組み合わせ、配置、空間構成や階段の高低段差の付け方、整地の仕上げの完成度、竹の扱い、配置・寸法、棕櫚縄の結び方と剪定手法など本質的な様々な技術の埋め込みが行われました。今後、現地ガーデナーたちが、これらを注意深くよく見て自らの技術の発展につなげてくれたらありがたいと考えています。

このたびは、全員が分かれてホスト (市民宅) への滞在となりましたが、受け入れ先では温かい声援ときめ細やかな歓迎を受けました。このことは参加者全員にとって忘れぬ思い出となったことと思います。最後になりましたが、箱根庭園に関わる多くの方々の温かいおもてなしに深く感謝いたします。

I. 箱根庭園の歴史

箱根庭園は、誕生から 90 年の歴史を経て現在のその姿をとどめています。なぜ「箱根庭園 (Hakone Gardens)」という名前なのかについては、当時、庭園築造に際して、創始者イザベル・スタイン氏らが日本の箱根地方を訪ねて、いたく感激をしたことが伝えられており、ここから命名されたのではないかと考えられます。

庭園の主景の 1 つは南側斜面の山筋から水を落とした滝流れで、庭園全体は池泉廻遊式庭園で築山の形状や石組み、景石の配置、飛石など伝統庭園の手法が随所にみられますし、高台には立派な上の茶屋：別荘風の書院：月見台 (1917) が造られており、当時の日本の大工職人技を見ることができます。

1915 年、サンフランシスコ芸術の良き理解者であり推進役だったオリバー、イザベル・スタイン (Oliver and Isabel Stine) 夫妻は、夏を涼しく過ごす別荘を建てるためにサラトガ山の中腹に約 18 エーカー (71,000 m²) の土地を購入しました。スタイン夫人は 1915 年にサンフランシスコで行われたパナマ太平洋万国博覧会での日本文化やその生活ぶりを紹介した展示に刺激を受けて、その翌年に日本を訪れ、特に富士-箱根国立公園を訪れて感動されたようでした。

スタイン夫人は、サラトガ市に戻るとすぐに庭園築造に着手し、大工・新谷常松氏 (和歌山県出身 1877 - 1921) を雇い入れて、1917 年、敷地の中腹に日本建築・上の茶屋「月見台」(Upper Moon Viewing House) を建設しました。この建物は数奇屋造りと書院造りが和合しており、当時の建築技術で造られています。

また同時期に庭師・相原直治氏 (1870 - 1941) を雇用し日本庭園築造を開始しています。なお、現在あるもう 1 つの古い日本建築・下の茶屋 (Lower House) は 1922 年 (1980 年に内部を一部改造) に建築されています。このように庭園は、1915 年から 18 年にかけて別荘として建設されたものです。

さて、いくつかの変遷を経て 1932 年に庭園の所有権は、近在の資本家 C. L. ティルデン氏に移りました。この頃、西浦新三郎氏 (奈良県出身) によって正門 (山寺風古代門) を庭園内に移築し、庭園に造詣があった中国系アメリカ人などとのパートナーシップにより運営を営ったものの庭園は序々に荒廃したため、1966 年、サラトガ市が解体・分譲と乱開発から庭園を守るために、この庭園を購入して公園としました。

この頃、当時の市長チャールズ・ロビン氏は安井清氏 (後に箱根庭園に尽力) を京都を訪ねて箱根庭園の改修と維持管理について相談をしています。また、サンマテオで個人住宅建設のため訪れていた安井氏は、サラトガ市の公園課職員として箱根庭園を管理していた石原淡草氏 (九州出身) と出会っています。石原淡草氏は京都で庭を学んだ庭師で、1968 年、サラトガ市の職員として庭園の手直しを行い、滝や池の修復をはじめ椿山や山道などもこの頃整備をされています。

その後、安井氏は茶室・伝統建築の専門家・中村昌生を連れて箱根庭園を訪れています。中村氏は箱根庭園についていくつか助言し、意見を述べていますが、その中で「アメリカ西海岸で苦心された大工技術と庭園の手法が良く分かり、そのままの状態で見られている歴史的にも保存すべき価値を有する庭園」と評価されています。

その後、石原氏は著書「HAKONE GARDEN : Tanso Ishihara and Gloria Wickham : 1974」を出版していますが、1980年に石原氏は不慮の事故で亡くなっています。石原氏の後任として、1976年から市職員として箱根庭園で働いていたジャック・トムリンソン氏は、1980年、庭園管理責任者として着任しています。

文化交流関係では、1980年、日本竹の会（会長上田浩一郎氏）サラトガ支部が結成されました。1981年、ジャック・トムリンソン氏は西山ロータリークラブ（京都）とサラトガロータリークラブの交換留学生として嵯峨野の庭師・榎木信太郎氏宅で2ヶ月間、そして翌年1982年の計2回、庭園の実地指導を受けています。また、安井氏の尽力で1984年に京都・向日市とサラトガ市は姉妹提携を結び、交流を開始しています。

箱根庭園は、この当時サラトガ市の所有ではありませんでしたが、同1984年に箱根財団を設立して組織として独自の管理運営に着手し始めています。だが肝心の資金面では高所得者、高級住宅地があるサラトガ市にもかかわらず、思うように寄付金が集まらず、運営はボランティアが中心でした。

1987年には安井氏らの協力で向日市在住の職人たちによって竹庭「絆園」：姉妹都市記念庭園が築造され、交流も徐々に回数を重ねて盛んになり、米国竹の会も結成されました。この頃、芸術文化交流の一環として象嵌の第一人者今井政之氏（広島県竹原市）の作陶講演や陶芸家・ロバート岡崎氏（中里太郎衛門の娘婿）の作陶展が開催されています。

1991年には篤志家・永井盛人氏（愛知県犬山市）の多額の寄付によって京都八幡市にあった民芸茶屋が文化交流会館(Cultural Exchange Center)として庭園内に建設されました。また1995年には永井氏、安井氏によって茶園が造られ、多種類の茶が現在も大切に育てられています。

1996年、サラトガ市民の増税反対及び市政の予算縮減により箱根庭園の運営費予算が大幅に削減され、1997年、箱根庭園はサラトガ市の公園という位置付けが無くなり、サラトガ市に代わって箱根財団がその運営のすべてを任されました。

1999年には、日本竹の会国際情報誌に「The Story of Hakone Japanese Gardens in Saratoga, Ca, USA : Jack Tomlinson」が掲載されました。2000年には、サラトガ市と箱根財団との間で以後55年間の管理運営契約を締結し、2003年にはアメリカ合衆国の重要文化財 : The National Trust' s Save America' s Treasure に登録され現在に至っています。

II. 箱根庭園支援の基本的な考え方

1. 庭園維持管理技術者の技術向上を支援

庭園の修復や維持管理の実践及び考え方・手法などについては、歴史的文化的価値を損なわないように配慮しながら、箱根庭園マスタープラン（2006）に準じて行うものとする。

次に、どこをどのような考えでだれがいつ行ったかについてはその詳細を記録して残す。また、実務においては、庭園修復・改修及び維持管理については現地技術者と協働しながら行う。

具体的には場所、設計・庭園材料・建設日数・建設費用・さらなる専門家の派遣・日本からの支援などのほか、庭園技術や工法についても、庭園委員会が専門家を交えて問題を探り内容を理解するなど、協議して最終的に承認を行う。これを受けて作業に入る。

庭園維持管理技術者の技術向上と養成では、日米庭園技術者同士が意見交換などをして、相互における日本庭園の地域性からくる形・技術・利用・考え方の違いや庭園の持つ本質的な価値としての時代や国を超えた見識などを相互に理解して高めるとともに、箱根庭園での維持管理の技術指導（トレーニング）を積極的に行い、これによって管理に関する考え方や方法、力量、日本庭園に対する理解など箱根庭園の維持管理に関わる総合的な質を向上させる。

庭園美の骨格となるものは何といても植栽であり、維持管理の技術レベルによっては大きくその美観・美的価値を損ねる。そのため庭園を美しく持続させていくためには配置場所、樹木の特徴や生育に応じた剪定技術が必要である。維持管理においては、技術のレベルアップと継続性が特に重要であり、技術水準を上げるには過去にポर्टランド日本庭園が行ってきたように日本人技術者が数年庭園に在駐して直接維持管理を行い、かつ現地ガーデナーを指導訓練すること（ディレクター制度）が有効であるが、短期的には今回のようにガーデナーの実務研修や実技（デモンストレーション）、技術交流によって意識と技術の向上を目指すことが有効である。

2. 庭園の文化的価値を考える

箱根庭園は、90年の歴史のなかで、既にその体裁を整えた伝統形式（当時の庭園技術）の日本庭園であり、むやみに改変してはその価値を逸してしまう。庭園の修復・改修や新しく行う庭園築造に関しては箱根庭園の存在意義や形式、文化的価値、将来性などを担保する議論を行った上で、最小限の庭園変化にとどめるべきである。

また、庭園修復・改修や築造で導入される庭園技術も現存する箱根庭園の技術・手法を十分に検証して理解した上で、その技にならった技術を導入することが重要である。

庭園は本来、その数ほど庭園技術があり、よって豊かな表情が庭園の味わいや魅力に繋がっているとも言えるが、箱根庭園のように長い歴史のなかで発揮されてきた技術や手法に他のさまざまな技術や手法が入り込むと技術・手法の混乱が起こり、不調和を起こして結果的に美の形成に繋がらない懸念がある。この点は特に十分な配慮が必要である。

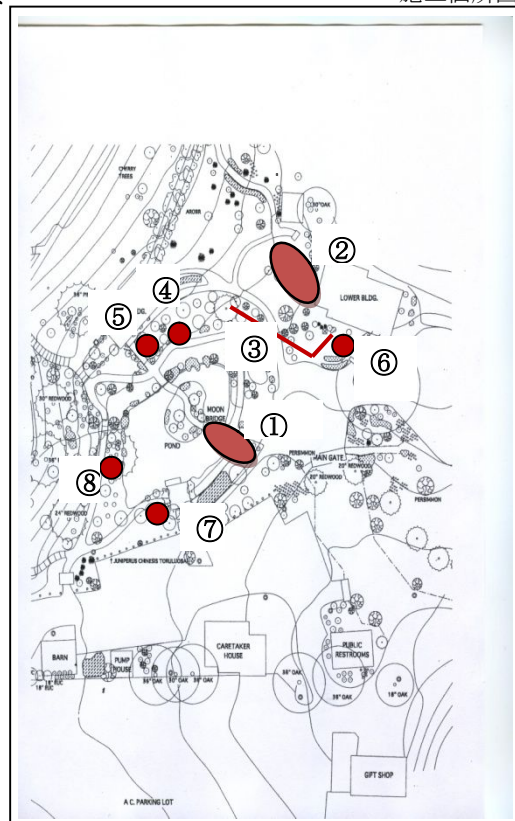
Ⅲ. 支援の内容

1. 庭園の改修及びデモンストレーションの概要

箱根庭園に到着後、小形会のメンバー紹介を行ったのちに庭園関係者と小形会全員で庭園全体をめぐり、箱根庭園がどのような庭園であるかを見て回った。庭園はよく剪定管理されていたが、長年の成長によって樹木が大きくなりすぎ、場所によっては心地よい空間スケールが消失しているところも見受けられた。

さて、ひと回りしたあと、修復、改修及びデモンストレーションを行う個所について全員で検討を行った。その結果、庭園内数か所において改修が必要とのことであったが、庭園の歴史性やもともと持っている山荘庭園としてのユニークさ、加えて今回の時間的な面も考慮して大きな改修は行わず、最終的に小形会としては、以下の修復改修および剪定作業を行うことを Garden Committee (庭園委員会) に提案。加えてその全過程を庭園技術のデモンストレーションの場とすることとして委員会の了承を得た。

施工箇所図



①. 階段の改修及びデモンストレーション

工種：階段の改修（付け替え）と周辺の修景

場所：正面から上池に上がる直線階段

技術者：○長谷川雅信（主任、理事）、永井良（理事）、森博保、小銭英泰、森川泰昭

改修理由：①蹴上に丸太が使用され意匠性に乏しい②正門から庭園に入ると最初に見える景色である階段が直線的で、その前方のアーチ橋と階段が視覚的に直線となって重なり景観を単純化している。空間構成からみて奥行き感を阻害しているため、線形を変え、石段に付け替える。

ステップ1-1日目-

計画に従い、既存階段の撤去、アセビなど植物の移動などを行った。続いて縄張りを行い、蹴上の高さ、カーブの持つ雰囲気など全体の構成を確認したあと床掘りにかかった。

次にはさみ石、景石を要所に据えて下段、上段あたりから階段の蹴上石の据え付けをスタートさせた。

ステップ2-2日目-

下段、上段の蹴上石を据えたのちに中段部分の蹴上石の据え付けに取り掛かった。その間、若干の景石も周辺に据え、全体の形がはっきりしてきた。次に踊り場の石畳に移った。

ステップ3 - 3日目 -

午前中でほぼ石畳も終わり、目地入れに取り掛かった。目地は浅くして歩きやすいようにとモルタル止めとし、その上に砂利（2分）を敷き、モルタルが付着した石を水洗いした。階段両周りには客土をしてツツジ類、笹類の植栽を施して雪見灯籠を据え、周辺全体を整地して作業を終えた。

ステップ4 - 4日目 -

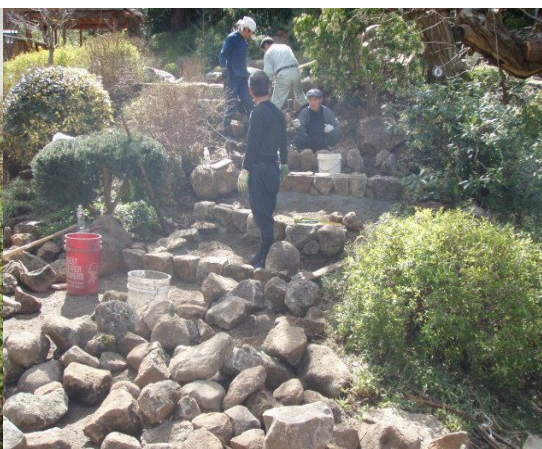
全体に簡単な修正、手直しを行い、竹の手すりを配置して全作業を終了した。



改修前



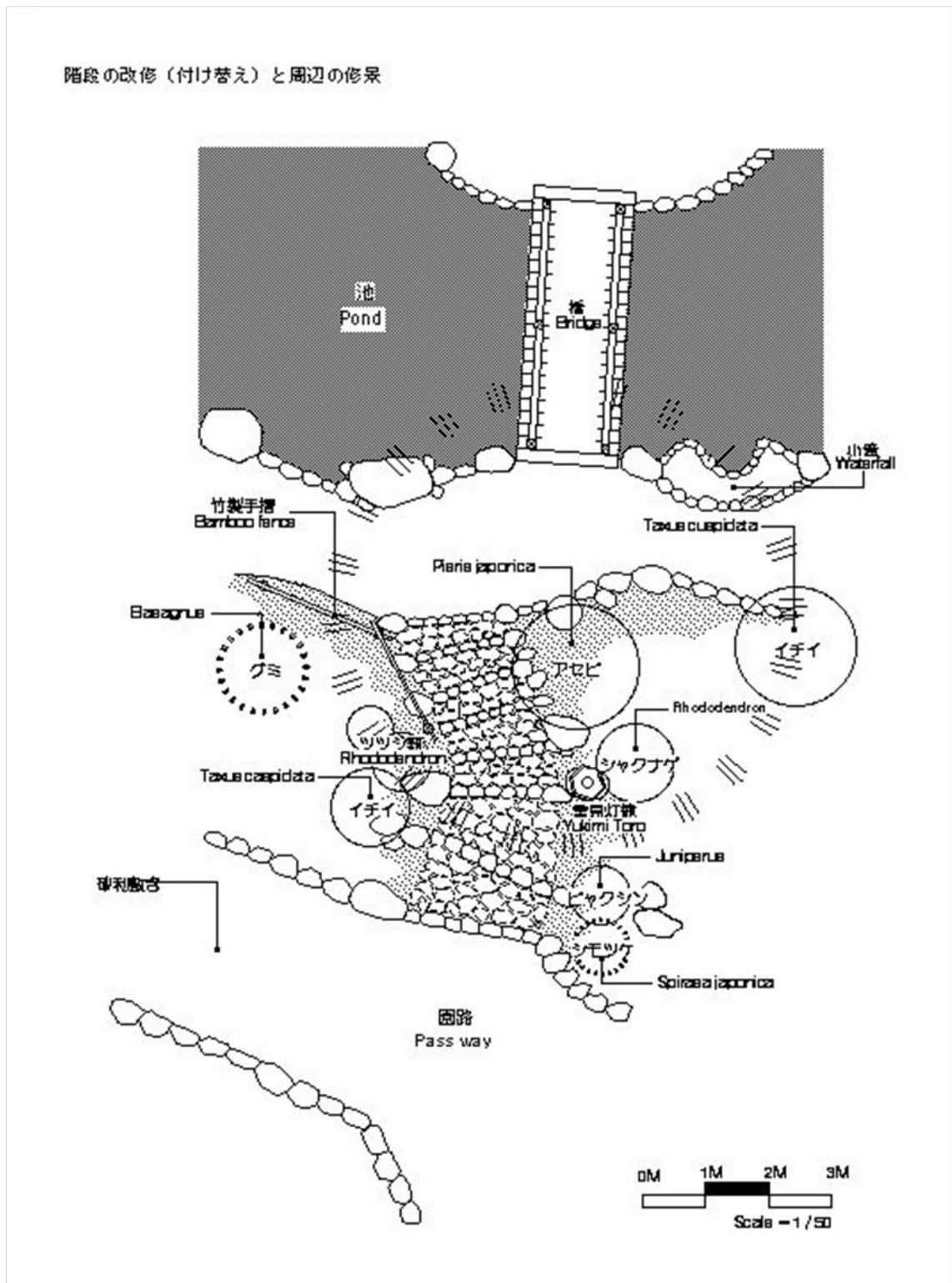
完成



上下共施工中



階段 施工平面図



②. つくばい周辺の改修及びデモンストレーション

工種：つくばいと通路の改修及びその周辺の修景

場所：茶庭内

技術者：○星野司郎（全体監理、団長、理事）、坂本和男、井出浩、野開喬太、高田武司

改修理由：①路地として茶事に使いにくい、②本来、つくばいの景色は鉢、手燭石、湯桶石、前石、灯ろう、植栽との組み合わせで完結した美の空間を形成しているが、ここでは鉢前の空間構成上おさまりという点でそのバランスが崩れていた。

ステップ1－1日目－

既存の手水鉢を移動して周辺の床掘りに取り掛かった。おおよそ掘り下げたところで手水鉢を据え直した。使い勝手など高さの調節をした後、役石（手燭石、湯桶石、前石）の据え付けにかかった。同時に飛石の撤去にも取り掛かった。

ステップ2－2日目－

灯ろうも据えて、おおよそ鉢前の形が仕上がったところで飛石を含む園路に取り掛かった。Lower House との接点には大振りの御影切石をおさまりに気遣いながら据え付けた。続いて庭門に伸びる既存の飛石の一部をはずして、勾配を消去するためにいくつかの階段を設置するように切り土を行った。切石と飛石がつながるようにあられこぼし延段を設置した。

ステップ3－3日目－

茶庭内の飛石をほぼすべて一旦はずし、新たに方形の切石を使い小階段とし、そこに飛石を絡めて据え直しにかかった。飛石は既存の枚数では足りないために、園路の中間にいくつかの御影切石を短冊状に据えて歩きやすくし、しかも景色としても美しく調和が取れるように配慮して据えた。

ステップ4－4日目－

庭門付近（茶庭外側）の飛石も小ぶりのものが多く、歩幅もまちまちで歩きにくいため据え直し、待合い（東屋）と茶庭に向かう動線を明確にした。つくばい、飛石がほぼ完了したところで地コケの張りつけにかかり、周辺にはツワブキ、クサソテツを植栽し、置き灯ろうも配置して景を整えた。最後にカケヒも取り付けて雰囲気のある茶庭としてリニューアルした。



改修前

完成



改修前



完成



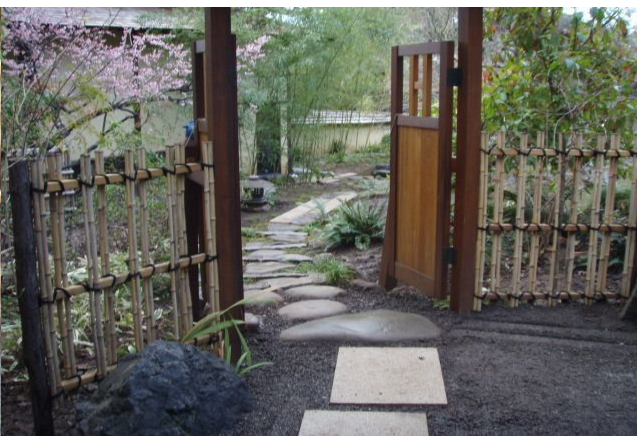
施工中 1



施工中 2

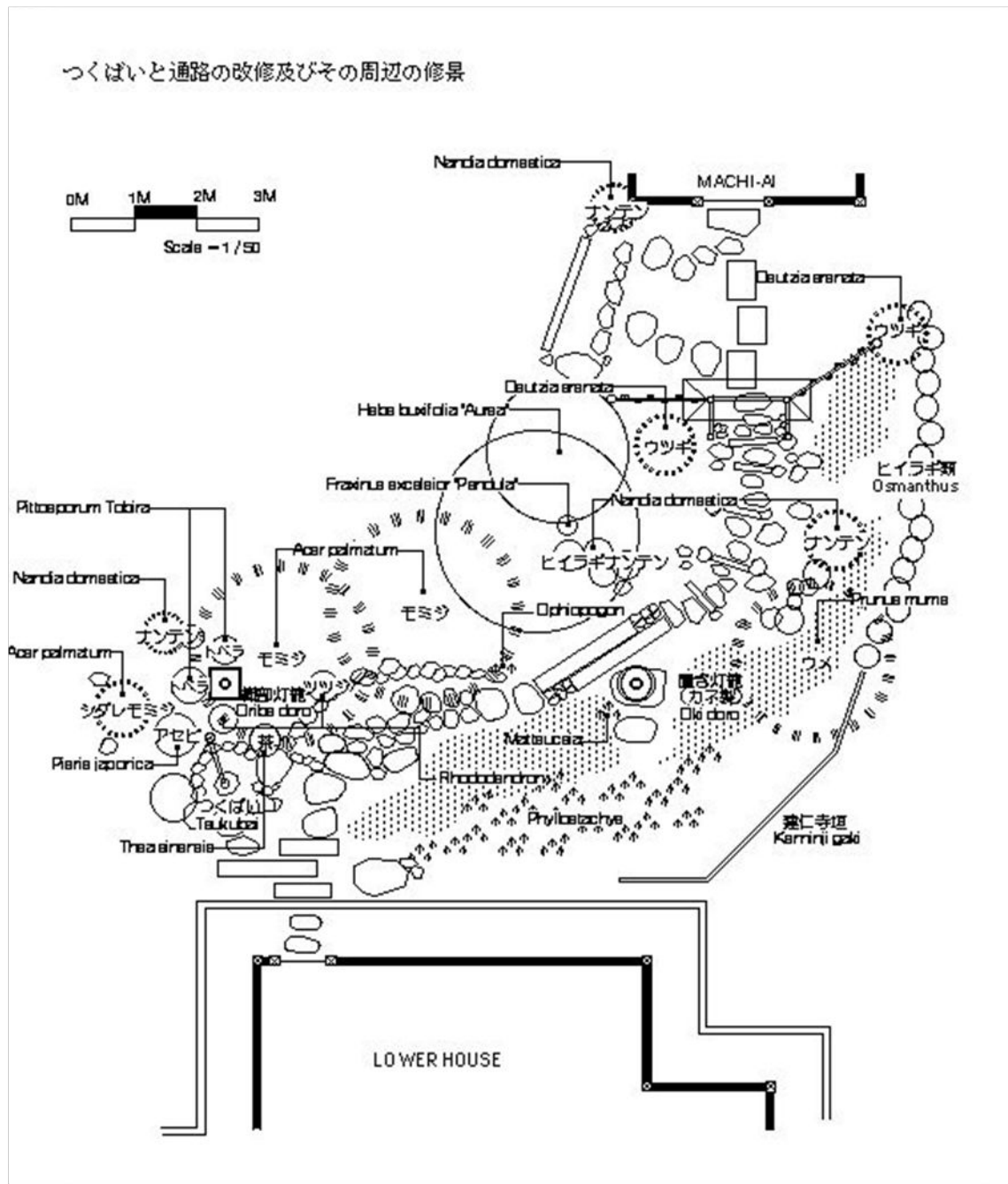


施工中 3



施工中 4

茶庭 施工平面図



③. 竹垣の修復及びデモンストレーション

工種：四つ目垣の修復（立て子の取り付け、棕櫚縄の結束）

場所：Lower House と茶庭を取り囲む垣根

技術者：○森博保、坂本和男、井出浩、野開喬太、高田武司

修復理由：四つ目垣を想定してつくられたものと思われるが、立て子がなく不完全であるため、立て子を加えてこれを完成した。



改修前



施工中

④. 落葉樹類の剪定（デモンストレーション）

サクラ類（Plunus）、モミジ類（Acer Palmatum）を中心とした落葉樹の剪定技術の指導と助言。これについては現地ガーデナーとともに剪定作業を行った。どこをどのように落とすのか、落とすとその近辺の枝がどのように伸びていくのか、ここでのボリュームはこのくらいのバランスがよく、他方ではもっと大きく成長させて、このくらいの大きさ、枝はこちらの方にこのくらい伸ばしたらいいなど具体的なアドバイスをを行い、樹木そのものの剪定と庭園全体の空間構成での樹木の形態及びバランスなど2面性から説明を行い、実際に剪定作業を行って見せた。



デモンストレーション中

⑤. Upper House 前のチャボヒバ (Hinoki Cypress) の剪定

樹木が大きくなりすぎて建物から前方に開ける眺望を阻害しているため約1m (3ft) 切り下げた。



⑥. Escallonia fradesii (日本にはない種類) 剪定による景の改善

築地塀のほぼ全体を隠して、塀と植物の程よい関係性を断っているため、全体に1/3程度切り下げた。

施工中

塀が大きく表れて塀と植物の関係が現れ、塀の裾を植物があしらい、庭園的な雰囲気があらわれてきた。2年後に14cm (5in) ほど切り下げてその高さを維持することを伝えた。



Escallonia fradesii 施工前



施工中

⑦. トベラ (Pittosporum) の剪定による景の改善

池に張り出していて修景効果の高い低木であるが、長年の成長で大きくなりすぎて景のバランスを著しく崩していた。高さを約1/2に切り下げ、中透かしを行い、全体として小さくまとめて適正規模に切り詰める作業を行った。



Pittosporum 施工中

⑧. マツ (*Caltha palustris*) の剪定 (デモンストレーション)

現地ガーデナーと共にマツの芯の止め方、枝の抜き方、葉の摘み方などを行い、実地指導を行った。



デモンストレーション中

○日程 2009. 02. 23～03. 03

- 2月23日 成田発—サンフランシスコへ
2月23日 サンフランシスコ着、サルトガ箱根庭園にて支援内容など打ち合わせ
庭園委員会開催、ここで支援内容を提案して承認を受ける
2月24日 終日作業
2月25日 終日作業
2月26日 終日作業
2月27日 終日作業終了後、理事会で小形会メンバーの紹介を受ける
ホストを交えて夕食会
2月28日 サンフランシスコ近郊の造園研修
3日1日 サンフランシスコ近郊の造園研修
3月2日 サンフランシスコ発—成田へ
3月3日 成田着、解散



○参加者 12名

- | | |
|------------------------|--------------------|
| 1、星野司郎（東京）（全体監理、団長、理事） | 8、長谷川雅信（千葉）（主任、理事） |
| 2、野開喬太（富山） | 9、坂本和男（山口） |
| 3、森川泰昭（東京） | 10、井手浩（福岡） |
| 4、高田武司（茨木） | 11、土沼隆雄（新潟） |
| 5、小銭英泰（岡山） | 12、田中徹（米国ポートランド市） |
| 6、森博保（徳島） | |
| 7、永井良（東京）（理事） | |

© 報告書作成 小形会 2009. 04. 05